

ゲーテ『ファウスト』における Körper について

大杉 洋

本稿では、ゲーテの『ファウスト』に関して、„Körper“に着目して論じてみたい。筆者がこのテーマを選んだときに、まず思い浮かんだのは、ゲーテの『ファウスト』では、むしろ„Körper“と対をなす„Geist“の方が頻繁に用いられているのではないかと、いうことだった。例えば、『ファウスト』第1部冒頭において、ファウストは4つの学問を徹底的に学んだけれども、自分は何一つ知ることはできないことを嘆きながら次のように言っている。

Faust.

Drum hab' ich mich der Magie ergeben,
Ob mir, durch Geistes Kraft und Mund,
Nicht manch Geheimnis würde kund;
Daß ich nicht mehr, mit sauerm Schweiß,
Zu sagen brauche was ich nicht weiß;
Daß ich erkenne was die Welt
Im Innersten zusammenhält,
Schau' alle Wirkenskraft und Samen,
Und tu' nicht mehr in Worten kramen. (Goethe: Faust I, Z. 377ff.)¹⁾

だから私は霊の力や啓示で、
多くの秘密を知ることができないかと思って、
魔法に手を染めたのだ。
その秘密が分かったら、辛酸の汗を流して、
自分が知らぬ事を人に言わなくても済むと思ったのだ。
この世界を奥の奥で束ねているもの、
それが何か知りたい。
働いている一切の力、一切の種子は何か、それが見たい。
そしてもう、言葉探しに躍起にならずに済みたいのだ。

1) 本稿で引用したテキストは、以下のものを用いた：
Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke, Briefe, Tagebücher und Gespräche. [以下 FA と略記する] 1. Abt. Bd.7/1. Hg. von Albrecht Schöne. Frankfurt a. M. 1999.

世界を奥の奥で束ねているものがなんであるかを知りたい、という、いわば神と肩を並べようとするファウストが取り組んだ学問、そしてそれが及ばずに手を染めた魔法、いずれも „Geist“ の領域の営みであると言えるであろう。このファウストの関心事に呼応するように、『ファウスト』全体を通して „Geist“ の用例は枚挙にいとまがない。

さて、それでは、『ファウスト』において、„Körper“ がクローズアップされるのは、どの場面だろうか。それは、「書齋」の場面で、むく犬に化けていたメフィストフェレスが正体を現し、自己紹介をしているくだりである。

Mephistopheles.

Ich bin ein Teil des Teils, der Anfangs alles war,
 Ein Teil der Finsternis, die sich das Licht gebar,
 Das stolze Licht, das nun der Mutter Nacht
 Den alten Rang, den Raum ihr streitig macht,
 Und doch gelingt's ihm nicht, da es, so viel es strebt,
 Verhaftet an den Körpern klebt.
 Von Körpern strömt's, die Körper macht es schön,
 Ein Körper hemmt's auf seinem Gange,
 So, hoff' ich, dauert es nicht lange
 Und mit den Körpern wird's zu Grunde gehn. (Goethe: Faust I, Z. 1349ff.)

私は、はじめに一切であった部分のそのまた部分です。
 光を生んだ暗黒の一部分です。
 驕れる光は、母の闇夜と
 古い位や空間をめぐって争います。
 しかしいくら骨折ってもそれが出来ないのは、
 光が捕われて物体にこびりついているからです。
 光は物体から流れて、物体を美しくする。
 物体が光の行く道を妨げる。
 ですから、私の期待するところでは、それは長続きせず
 光は物体と一緒に滅びてしまうこととなりましょう。

ファウストと対をなす存在であるメフィストフェレスが、„Geist“ と対をなす „Körper“ をくりかえして用いているこの箇所は、きわめて印象深く感じられる²⁾。以下、本稿においては、„Körper“ という言葉が派生語を含めて使われている箇所、あるいは „Körper“ という言葉は使われていないけれど

も, „Körper“ に言及している箇所を取り上げて考察を試みてみたい。このことを通じて, „Körper“ がつねに „Geist“ との関連において描かれていること, „Körper“ と „Geist“ の双方がたがいに補いあって, 人間存在全体を形作っていることを確認することができると思われる。

さて, 『ファウスト』第1部において, はじめて „Körper“ に言及されるのは, 先の「書斎」の場面に先立つ「市門の前」の場面においてである。弟子のヴァーグナーを伴って夕方の散歩をしているファウストは, 周囲の情景に心を和ませるが, それも束の間, 学者として抱えている日頃の悩みが表に出てくる。

Faust.

Ach! zu des Geistes Flügeln wird so leicht
Kein körperlicher Flügel sich gesellen.
Doch ist es jedem eingeboren,
Daß sein Gefühl hinauf und vorwärts dringt,
Wenn über uns, im blauen Raum verloren,
Ihr schmetternd Lied die Lerche singt;
Wenn über schroffen Fichtenhöhen
Der Adler ausgebreitet schwebt,
Und über Flächen, über Seen,
Der Kranich nach der Heimat strebt. (Goethe: Faust I, Z. 1090ff.)

ああ！ そうたやすくは精神の翼と、
身体の翼が道連れになることはないのだ。
だが、誰もが生まれつき、
気持ちちが上の方へ、前の方へと駆りたてられてしまう、
頭の上で、蒼々とした空間に隠れて、
ヒバリが高らかに歌を歌うとき、
トウヒの木が茂っている、険しい高みの上空に、
鷺が翼をひろげて漂っているとき、
広野の上、海原の上を渡って
ツルが故郷へ帰って行こうとするときには。

-
- 2) ヨッヘン・シュミットは, このメフィストの発言における歴史性を指摘している。近代啓蒙思想と親近性があり, 来るべき唯物論思想の先駆けとなっている, と。S. Jochen Schmidt: Goethes Faust. Erster und Zweiter Teil. Grundlagen – Werk – Wirkung. München 1999, S.123f.

ここで強調されているのは, „Körper“ (身体) の有限性である。精神の領域は無限とも言える広がりがあるが, 個々の身体には時間的にも空間的にも歴然とした限界がある³⁾。と同時にこの箇所は, 『ファウスト』第1部冒頭のファウストの嘆きの変奏と受け取ることもできるであろう。限界を設けられたひとりの人間が到達できる範囲は, おのずと限りがあること, への嘆きがここでも繰り返かえされているのである⁴⁾。

メフィストと道連れとなったファウストは, 若返り, 庶民の娘, マルガレーテと恋仲となる。恋の喜びに酔いしれながら, しかし, ファウストは「森と洞窟」の場面で, 地の霊に向かって次のように語っている。

Faust.

O daß dem Menschen nichts Vollkomm'nes wird,
Empfind' ich nun. Du gabst zu dieser Wonne,
Die mich den Göttern nah und näher bringt,
Mir den Gefährten, den ich schon nicht mehr
Entbehren kann, wenn er gleich, kalt und frech,
Mich vor mir selbst erniedrigt, und zu nichts,
Mit einem Worthauch, deine Gaben wandelt.
Er facht in meiner Brust ein wildes Feuer
Nach jenem schönen Bild geschäftig an.
So tauml' ich von Begierde zu Genuß,
Und im Genuß verschmacht' ich nach Begierde. (Goethe: Faust I, Z. 3240ff.)

ああ, 人間には何一つ全き物が与えられないことを
私は今感じる。お前は私を神々に
近く, より近くするこの喜びを授けると同時に,
私に道連れをくれた。そいつをもう手放すことができない,
そいつが冷酷に, 不遠慮に
私をおとしめ, お前のくれた物を,
ただの一息で, 無にするにもかかわらず。

-
- 3) 身体の有有限性に関しては, 『西東詩集』においても「身体が牢獄であるならば」という詩句が見出される。S. FA. 1. Abt., Bd. 3/1, S. 106.
- 4) 「夜」の場面においては, ファウストのこの絶望感が自殺願望に高まり, 毒を飲んで自分の身体をなきものにしようとしたが, 復活祭の教会音楽が耳に届くと, ファウストはそれを思いとどまった。S. Thorsten Valk: Melancholie im Werk Goethes. Genese - Symptomatik - Therapie. Berlin 2002, S. 283.

そいつが私の胸に、烈しい火を
 あの美しい姿に憧れるように、せっせと吹き起した。
 そこで私は欲望から享楽へとよるめき、
 享楽の最中にまた欲望にあこがれるのだ。

ファウストは、したたかな道連れであるメフィストに手を焼いていること、そして、マルガレーテへの恋心が美しいものであると信じてつても、自分の肉欲をいかんとも制御できないことを嘆いている。ここでは身体のもう一つの有限性、すなわち、本能的な欲望を、本人の意志で完全にコントロールすることはできないことが示されている⁵⁾。

『ファウスト』第1部は、マルガレーテがファウストとの間にできた赤子を死なせた罪で断頭台にのぼるといふ悲劇的な結末を迎える。第2部冒頭では、その良心の呵責に苦しんで眠れずにいる様子のファウストを回復させるべく、精霊アーリエルが妖精達に向かって語りかける。

Ariel.

Erst senkt sein Haupt aufs kühle Polster nieder,
 Dann badet ihn im Tau aus Lethes Flut;
 Gelenk sind bald die krampferstarrten Glieder,
 Wenn er gestärkt dem Tag entgegen ruht;
 Vollbringt der Elfen schönste Pflicht,
 Gebt ihn zurück dem heiligen Licht. (Goethe: Faust II, Z. 4628ff.)

まず彼の頭を冷たい枕の上に乗せて、
 それからレエテの水の雫で入浴させておやり。
 力が戻って静かに夜明けを待っていれば、
 まもなく引きつっていた手足もしなやかになる。
 エルフの義務の中の一番美しい義務を果たし、
 彼を神聖な光の中へ返しておやり。

ここでアーリエルが妖精達に命じている処方は、睡眠と入浴である。言い換えれば、疲労困憊した身体 „Körper“ を整えさせていることになる。その後、緑豊かな野原の日の出の美しい光景に接して、ファウストの内面 „Geist“ も

5) 身体が、その所有者である人間の意のままにならないことについては、『若きヴェルテルの悩み』においても、牧師夫人の発言として語られている。S. FA. 1. Abt., Bd. 8, S. 64.

生気を取り戻す。『ファウスト』第2部では、疲労困憊に陥ったファウストが生気を取り戻す場面がもう一つある。第2幕「古典的ヴァルプルギスの夜」の場面でヘレナを追い求めるファウストが、古代ギリシアの大地に降り立ち、自分が、かつてヘレナが歩んだ大地に立っていることに感動する場面である⁶⁾。いずれの場面でも、ファウストの身体が自然に触れて、生気をよみがえらせているのである。

その「古典的ヴァルプルギスの夜」の場面は、ファウストの弟子ヴァーグナーが造り出した人造人間、ホムンクルスを抜きに語ることはできない。哲学者タレスはホムンクルスのことを次のように言っている。

Thales.

Es fragt um Rat und möchte gern entstehen.
 Er ist, wie ich von ihm vernommen,
 Gar wundersam nur halb zur Welt gekommen.
 Ihm fehlt es nicht an geistigen Eigenschaften,
 Doch gar zu sehr am greiflich Tüchtighaften.
 Bis jetzt gibt ihm das Glas allein Gewicht,
 Doch wär' er gern zunächst verkörperlicht. (Goethe: Faust II, Z. 8246ff.)

知恵を借りて生まれようとしているのさ。
 彼から聞いたところでは、
 奇妙なことに半分世に出て来たのだという。
 精神的な特性は不足ないのだが、
 手ごたえのあるしっかりとしたところがないのだ。
 今までは、目方があるのは器のガラスだけだが、
 まずは体を備えてもらいたいと言っている。

ガラスの器の中で、さまざまな物質の化合によって生まれたホムンクルスであるが、生まれながらに卓越した精神的能力を備えながら、身体を持つには至っていない。本来は存在の前提であるはずの身体を持たないというところが、はじめて造られた人造人間の描き方としてとても興味深く思われる。

さて、第3幕ではファウストが念願のヘレナとの邂逅をはたし、幸せをつかむ。しかし、その幸せは長続きすることはなかった。2人の息子オイフォ

6) Vgl. Albrecht Weber: Goethes „Faust“. Noch und wieder?. Phänomene, Probleme, Perspektiven. Würzburg 2005, S. 76.

リオンが転落死すると、ヘレナも彼の後を追うのである。ファウストとヘレナの別れの場面は以下のように綴られている。

Sie umarmt Faust, das Körperliche verschwindet, Kleid und Schleier bleiben ihm in den Armen. (Goethe: Faust II, Bühnenanweisung vor Z. 9945)

彼女（ヘレナ）がファウストを抱きしめる。その身体は消え失せ、衣装とヴェールがファウストの手に残される。

傍らにいたメフィスト扮するフォルキアスは、その衣装を離さずにしっかりともっておけ、とファウストに命じる。それは、ヘレナの身体ではないけれども、神性を帯びている、というのである。ここでは衣装が、いわば「第二の皮膚」として、身体に準ずるものとして描かれている。

さて、大詰めの第5幕に論を移してみたい。ファウストは、自分が将来築く国家を思い浮かべるうちに「とまれ、お前は美しい」と口走り、息絶える。ファウストとメフィストの契約に従い、ファウストが死んだ後、ファウストはメフィストの思いのままである。メフィストはファウストの遺体を見つめながら言う。

Mephistopheles.

Der Körper liegt und will der Geist entfliehn,
Ich zeig' ihm rasch den blutgeschriebnen Titel; —
Doch leider hat man jetzt so viele Mittel
Dem Teufel Seelen zu entziehn.
Auf altem Wege stößt man an,
Auf neuem sind wir nicht empfohlen;
Sonst hätt' ich es allein getan,
Jetzt muß ich Helfershelfer holen. (Goethe: Faust II, Z. 11612ff.)

体が横たわっている。そして霊が逃げようとしている。
早くあの血で書いた証書を見せよう。
だが今では悪魔の手から霊を取り上げるのに、
色々な手段があつて困る。
もう昔の流儀ではうまくいかん。
新しい流儀では我々は頼りにならない。

以前は俺がひとりでやったが、
今は手伝いを連れて来なくちゃならん。

メフィストはファウストの遺体から霊を取り出そうとする。このセリフにおいても „Körper“ と „Geist“ という図式が見出されるのが理解される。しかし、天上から降りてきた天使たちがファウストの霊をメフィストから奪い、天上へと運んでいく。興味深いことに、この霊は「ファウストの不死なるもの」(Faustens Unsterbliches) と表現されている。なぜ単に「霊」(Geist) と表記されなかったのだろうか。その答えの手がかりは、次の場面において見出せるように思われる。

その最終場面では、ファウストよりも先に天に昇ったマルガレーテ、愛称グレートヒェンが昇ってきた「ファウストの不死なるもの」を見て、次のように言っている。

Die eine Büßerin sonst Gretchen genannt.

Vom edlen Geisterchor umgeben,
Wird sich der Neue kaum gewahr,
Er ahnet kaum das frische Leben,
So gleicht er schon der heiligen Schar.
Sieh! wie er jedem Erdenbande
Der alten Hülle sich entrafft,
Und aus ätherischem Gewande
Hervortritt erste Jugendkraft. (Goethe: Faust II, Z. 12084ff.)

気高い霊の群に取り巻かれて、
新たに來られた方は自分で自分がお分かりにならないようです。
まだ新しい生活に気がつかない様子です。
それでももう神聖な方々に似てまいりました。
御覧なさい。大地の絆を皆切って、
古い衣からそっくり抜け出されました、
そして天空の衣からは、
初々しい若者の力が、現れ出ています。

ここで着目したいのが「天空の衣から」、そして「初々しい若者の力」、「現れ出て」という表現である。これらの表現は、身体なくしては考えることができない。ここでは、天上まで昇ってきた霊的なものが、身体性をもたせて

表現されているのである。先の場面で「ファウストの霊」と言わずに「ファウストの不死なるもの」と表現していたのは、昇天したファウストにもなお、身体性を付与させて描きたい、という作者の意図があったのではないだろうか。この点に関しては、ゲーテが自然科学研究から得た知見も指摘することができる。『形態学論考』の序文において、ゲーテは、すべて生命あるものには、外界から自らを守る「覆い」が存在する、と言っている (FA, 1. Abt., Bd.24, S. 395)。「天空の衣」は、天におけるファウストの新たな生命の現れを雄弁に物語っているのである。

以上、ゲーテの『ファウスト』から „Körper“ に着目して、引用と考察を試みてきた。全体を通して感じるのは、„Körper“ と „Geist“ という図式が作品全体を貫いていることである。„Körper“ と „Geist“ の対比は、ゲーテの文学作品においても、また彼の自然科学研究においても数多く見出される両極性 (Polarität) の一つに他ならない。ゲーテの『ファウスト』においては、„Geist“ に比べると、„Körper“ に言及される場所は少ないが、存在の前提として欠かせない „Körper“ という認識が作品の随所随所で見出される。その意味では、„Körper“ をしきりに連発していた「書齋」の場面におけるメフィストのセリフは、作品全体に大きな役割を果たしていると言えるであろう。そして、作品の中で „Körper“ に言及されている箇所を辿っていくと、人間存在における „Körper“ の普遍的な諸相が要所要所で浮き彫りになっていることが確認できるのである。

Zur Bedeutung von „Körper“ in Goethes „Faust“

Hiroshi OHSUGI

In der Szene „Nacht“ in Goethes „Faust I“ stößt Faust als großer Gelehrter an die Grenzen der Wissenschaften und ergibt sich der Magie: „Ob mir durch Geistes Kraft und Mund / Nicht manch Geheimniß würde kund“. Nicht nur als Gelehrter, sondern auch als Wanderer im Reich der Magie ist der Geist für ihn von größter Bedeutung. Aber in Goethes „Faust“ gibt es auch zahlreiche bemerkenswerte Stellen, in denen es um Körper geht. In diesem Aufsatz werden einige dieser Szenen betrachtet. Dabei zeigt sich, dass der Körper immer in einem Verhältnis zum Geist dargestellt ist und nur beide sich ergänzend einen ganzen Menschen ausmachen.

In der Szene „Studierzimmer“ wiederholt Mephisto in seiner Selbstvorstellung das Wort „Körper“: Das stolze Licht klebe verhaftet an den Körpern, von Körpern ströme es, die Körper mache es schön, ein Körper hemme es auf seinem Gange. Hier betont Mephisto den Körper, der das Gegenteil des Geistes ist.

In der Szene „Vor dem Tor“ klagt auch Faust selbst: „Ach! zu des Geistes Flügeln wird so leicht / Kein körperlicher Flügel sich gesellen.“ An dieser Stelle ist von der Begrenztheit des Körpers die Rede. Man kann sie als Weiterführung der Klage ansehen, die Faust in der Szene „Nacht“ vorgebracht hat: Die Reichweite eines Menschen ist, begrenzt, geistig und auch körperlich.

In der Liebe mit Gretchen erfährt Faust, dass er seine körperliche Triebkraft nicht kontrollieren kann. Auch hierin zeigt sich eine Begrenztheit des Körpers.

Am Anfang von Faust II, in der Szene „Anmutige Gegend“, bittet Ariel die Elfen, Faust schlafen und baden zu lassen, um ihm neue Lebenskräfte zu geben. Damit werden sein Körper und sein Geist, von schönen Naturerscheinungen umgeben, neu belebt. Auch in der Szene „Klassische Walpurgisnacht“ kehren Fausts Lebenskräfte durch die Natur zurück, als er die Erde berührt, auf der Helena einmal wanderte.

Homunkulus, ein Kunstmensch, den Fausts Schüler Wagner geschaffen hat, stellt die rein geistige Kraft dar. Er hat von Geburt an hervorragende geistige Eigenschaften, doch fehlt es ihm an dem Körper, der eigentlich die Voraussetzung des Daseins ist.

Im 3. Akt begegnet Faust endlich Helena und die beiden heiraten. Doch nach dem Tod ihres gemeinsamen Sohnes Euphorion verabschiedet sich auch Helena. Als Helena Faust zum Abschied umarmt, verschwindet „das Körperliche (...), Kleid und Schleier bleiben ihm in den Armen.“ Faust bleibt also nur Helenas Kleid, das sozusagen ihrer

körperlichen Hülle entspricht, während ihr Wesen nicht mehr gegenwärtig ist.

In der Schlusszene steigt Fausts Unsterbliches in höhere Ebenen auf. Dazu bemerkt eine Büßerin, die Gretchen ist: „Sieh! wie er jedem Erdenbände / Der alten Hülle sich entrafte, / Und aus ätherischem Gewande / Hervortritt erste Jugendkraft.“ Bemerkenswert ist, dass Fausts Unsterbliches, also Geistiges, „die alte Hülle“ zurücklässt, aber trotzdem seine Körperlichkeit behält, wie der Ausdruck „Hervortritt erste Jugendkraft“ zeigt. „Hervortreten“ ist ohne körperliche Gegebenheit nicht denkbar.

Der Gegensatz von Körper und Geist wird im ganzen „Faust“ durchgehend behandelt und zeigt eine der wichtigen Polaritäten im Werk Goethes.